

## 縄文よもやま話

家族の一員だった縄文犬 

イヌと日本人との関係は深く、その歴史は縄文時代にまで遡ります。

「縄文犬」は、その起源についてははっきりしていませんが、一説によると南方系の縄文人に連れられて日本列島に導入されたと言われています。

縄文犬の特徴としては、全体的に頑丈な体格で、雌雄の差が原生の日本犬より大きいことが挙げられます。前頭部から鼻先の額段はオオカミと同程度で、顔の幅は狭いとされています。キツネにも似た顔です。

縄文時代の狩りは鳥、アザラシ、シカなどを弓矢や銚（もり）、落とし穴などの手法を用いていました。その中でも縄文犬は、シカやイノシシを効率的に狩るため、追跡や捕獲などによって縄文人のお手伝いをしていました。

愛媛県久万高原町の上黒岩岩陰遺跡からは、埋葬されたイヌの骨が出土されており、放射性炭素の年代測定によると、7千年以上前の縄文早期のもので、埋葬されたイヌとしては国内最古の事例であることがわかっています。

このように、埋葬されたことがわかるイヌのお墓が出土している例から、縄文人がイヌを家族の一員として、特別な扱いをしていたことが伺えます。



## 縄文イベント情報 \* 詳細は、チラシやホームページ等でお知らせします。 \* 皆様からの情報もお待ちしております！

### 縄文夏まつり in チカホ ※新型コロナウイルスの影響により延期・中止となる可能性があります

■日時  
8月1日(土)～4日(火) 10:00～19:00  
(初日は11:00開始、最終日は17:00終了)

■場所  
札幌駅前通地下歩行空間 北大通交差点広場(東・西)

- 内容(予定)
- 出土品展示 (道内外の出土品を展示)
  - パネル展示 (縄文文化の魅力をわかりやすく解説)
  - 北の縄文セミナー@チカホ (道民カレッジ連携講座)
  - 縄文ワークショップ(ミニチュアの土器・土偶作り)
  - 展示品解説ツアー(専門家による展示品の解説) ほか



※本事業は公益財団法人太陽財団の助成を受けて実施します。

**編集後記**  
会員の皆様、いかがお過ごしでしょうか。雪解けを待ちわびたように今年も、色とりどりのスプリング・エフェラル(春植物)たちが咲きました。『北の縄文』春号の発行にあたり、舟本秀男・財界さっぽろ代表取締役社長様からご寄稿いただき、お礼申し上げます。  
今、私たち人類は、新型コロナのまん延で未曾有の危機に直面しています。ひたすら一日も早い収束を願ってやみません。編集部一同、今後も縄文パワー全開で、会員の皆様にご愛読いただける会報の編集に努めて参ります。(T.H)

編集・発行：北海道・北東北の縄文遺跡群の世界遺産登録をめざす道民会議 編集長 谷 紘道 編集委員 北山、西島  
TEL: 011-221-1122 FAX: 011-221-0117 <http://www.jomon-do.org/> E-mail [ebisutan@cbt.chuo-bus.co.jp](mailto:ebisutan@cbt.chuo-bus.co.jp)



令和2年 5月発行

|    |                 |       |
|----|-----------------|-------|
| 目次 | ■北の縄文コラム        | ・・・P1 |
|    | ■縄文よもやま話/イベント情報 | ・・・P2 |

### 北の縄文コラム

## 縄文文化に寄せて

今回は、間近に迫ったウボボイ(民族共生象徴空間)のオープンを記念して、アイヌ文化に精通し、2018年「北加伊道六十話」を上梓した舟本秀男氏(財界さっぽろ代表取締役社長)から、巻頭メッセージを頂きました。

2018年、北海道と命名されてから150年を迎えました。この年、私は「北加伊道六十話」という本を上梓し、我々の住む北海道を開拓された多くの方々のご苦勞とご功績を記述させて頂きました。その中で、先住民族として北海道(蝦夷地)の歴史を歩み、また抑圧されながらも開拓者と共にこの大地を切り拓いたアイヌ民族の方々について多くのページを割いております。

北海道と命名したのは松浦武四郎ですが、彼は知床で場所請負人に棍棒でたたかれ、目には深い悲しみをにじませながら働いているアイヌの人々を目にします。アイヌの男性は真っ黒な髪で長い髭、たくましい体つき。この時、武四郎は「なんと純朴な人達だろう」と愛おしささえ感じたことと記しております。新日高町には、「心情の素直で純朴なことは例えようがない。世の人々にアイヌ民族の美しい心を知って戴きたい」と記された武四郎の碑があります。

知里幸恵は「アイヌ神謡集」で、「原始林の中に溢れる生命。森にも川にも数えきれない命が溢れ……。アイヌたちは、自然界をカムイ(神)として尊び、祈り、泣き、怒り、喜び、まことに豊かな暮らしを送ってきました」と、大地と共生しているアイヌ民族を讃えております。

アイヌの人達は、コタンに住み、魚を採ったり、山菜を集めたり、山でクマやシカを採り、ヒエやアワなども栽培し、家族に必要な範囲のものだけを取得しておりました。また、魚や貴重な野獣の毛皮を商人と物々交換し、豊かな生活を送っていたと思われまます。

今(現在)、地球・資源の持続性(サステナビリティ)、地域の繋がり(コミュニティ)、自然との共生、自由・闊達な交易が叫ばれております。アイヌ文化はまさに我々が学び参考にすべきものではないでしょうか。

旭川市博物館の瀬川前館長は「アイヌこそが縄文人の正当な末裔で、縄文の習俗を最後まで守り通したアイヌの人々の文化を見ていけば、日本列島人の原郷の思想が明らかになるに違いない」と著書「アイヌと縄文」で述べられております。

アイヌの人々の生活・文化・心根が、数千年前の縄文時代にその原点があったとしたならば、夢が膨らみ、縄文文化を学ぶことによって、新型コロナの蔓延で明らかになった現代社会の矛盾や現代人のおごり高ぶりを正す方向に持っていけるのではないのでしょうか。

財界さっぽろ 代表取締役社長  
北の縄文道民会議会員 舟本 秀男

